

## 石井一男と須飼秀和

1992年に私と出会い、2004年に二人は出会った。

このところ毎年、11月の終わりに石井一男展と須飼秀和展を同時に開催してきた。

親子ほど年齢は違うが二人とも私のギャラリーでデビューした。生き方の誠実さで気心が通じるのか二人はお互いを思い遣り、仲がいい。それにしてもデビューしたあとの鮮やかな足取りは驚くほど似ている。

### 石井一男 「奇蹟の画家」と呼ばれて

呼んだのも、呼ばれたのも私ではない。呼んだのが後藤正治さんであり呼ばれたのは石井一男さんです。

後藤さんが講談社創業100周年記念出版で、石井さんを主人公としてノンフィクションを書き下ろしました。

出版にあたって相談があり「奇蹟の画家」と題されると聞き、奇蹟という言葉にたじろいだことを今もよく覚えています。

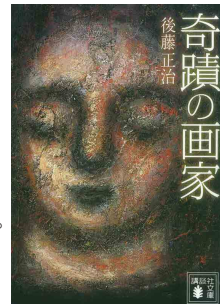
そしてTV「情熱大陸」で放映されて大フィーバーとなりました。どちらも売り込んだわけでは一切ありません。

石井さんの初個展が1992年、25年前です。「奇蹟の画家」の出版が2009年。情熱大陸がその翌年でした。

それからは神戸と各地で開催される年2回の個展にも、多くの方が足を運び、今もよく売れ続けています。2011年にBBプラザ美術館（灘区）で2か月間開催された「無垢の画家—石井一男」も大変好評でした。

振り返れば石井さんは、その佇まいにおいて小さな揺れはあったにしろ、ほとんど変わっていません。存在=作品であること。

今は絶対的な孤独ではないにしても、住まいも暮らしも、ほとんど変わることはありません。私はそのことが、誰にでも出来ることではないと思うのです。描き続けることの苦悩は当然あります。初期の作品にみられる、恥じらうような稚拙さはなくなりましたが、それに代わる奥深さや雅趣が現れています。棟割長屋で簡素に暮らし続ける石井さんの変わらぬ歩みに対し、私は今、たじろぐことなく「奇蹟」と呼ぶに相応しいと思えるのです。



#### ■ 石井一男 展

11月25日(土)~12月6日(水) B1F  
open 11:00~18:00 最終日は17:00まで

### 須飼秀和 求道者のように

2004年、京都造形芸術大学美術工芸学科洋画コース卒業。飛び込みでギャラリー島田に作品をもってきて、即座に初個展を決めました。蒼い空が象徴する懐かしくも美しい風景に惹かれたからですが、郷愁あふれる情景を上手に描いているのではなく、急速に失われようとしている「心の故郷」や人々の優しさや温もり、それを一途な目で見つめ、そこに混じりけのない純粹さと誠実さがストレートに伝わってきたからです。

現代に生きる人が懐かしむのではなく、須飼さん自身が「その時代のそこいる」という愛情を感じさせます。

デビューのころから、このジャンルでは谷内六郎(1921-1981)、原田泰治(1940-)が知られています。

彼らを超えていく可能性を秘めていると予測して語ってきましたが、その仕事は、それを裏付ける目覚ましいものです。

須飼さんを劇的に鍛え上げたのは、毎日新聞夕刊での全205回にわたる長期連載挿絵「帰りたい—私だけの故郷」(2008年—2012年)です。

多彩な顔ぶれの作家たちの、幼少時代の思い出に絵を添える。照る日、曇る日、雨の日、雪の日、夜、朝、祭、子供たち、何でもあり。

この企画は文と絵が同等なのです。人間的にも成長させる厳しい仕事でした。

明石市立博物館での須飼秀和展(2009年)、画集「いつか見た蒼い空」(シーズプランニング/2009年)、

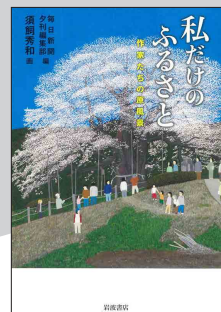
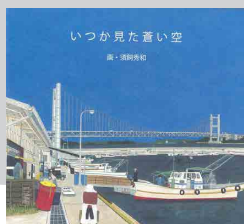
「私だけの故郷—作家たちの原風景」、(岩波書店/2013年)、「うなぎのうーちゃん」(福音館書店/2014年)、雑誌、新聞の連載も続きます。

2018年にはBBプラザ美術館(灘区)で須飼秀和展が計画されています。明石もBBも企画個展としては最年少画家です。

取材、制作で多忙ななかでも綿密な取材と精緻なタッチを無限に繰り返し、俯瞰と微細とを納得いくまで追求する大作にも取り組んでいて、イラストや挿絵といった範疇を超えた表現を求道者のように歩んでいます。

#### ■ 須飼秀和 展

11月25日(土)~11月30日(木) 1F trois  
open 11:00~18:00 最終日は17:00まで



ギャラリー 島田